
人を殺すために生まれたノラネコ

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人を殺すために生まれたノラネコ

【Nコード】

N8385U

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

「人を殺傷する能力」を持ったクローン人間、ノラネコの話。

ブローグ 科学者の手記

2002年 4月3日

これから私は、「ヒトを殺傷する能力を持つクローン人間」を作る。もしも研究が成功すれば、このクローン人間は画期的な人間兵器となりうるだろう。

クローン人間を作成するにあたり、墮胎された胎児の遺体を高値で買い取ってきた。この胎児の遺伝子から、クローン人間を作成するつもりである。人権を持つ人間のクローンを作った場合は問題となりうるだろうが、墮胎児のクローンならばどうだろうか……。

私はバイオエシックスを追及しているわけではない。私が求めているのは、結果だけだ。

本日から、研究に入る。買い取った胎児の性染色体はXX、すなわち雌だ。万が一研究が頭打ちになった場合は、雄の墮胎児も買い取るつもりである。

2

2002年 6月9日

クローン人間はともかく、「ヒトを殺傷する能力」を開発するのは難しい。ここでいう「殺傷する能力」とは、ナイフで刺したり銃で撃ち殺したりするような、単純なものではない。完全犯罪をも可能とさせる能力、だ。野暮な言い方をすれば、「魔法のような能力」だろう。

私はあくまで科学的に、その魔法を作りだすつもりだ。問題は、いかなる能力にするかである。他殺には見えない、殺し方。これを考えねばならない。

2005年 2月15日

私の開発した成長促進剤を投与することで、一般的なヒトの何倍もの速さでクローン人間を成長させることに成功した。また、成長促進剤を打つのをやめた段階で、クローン人間の成長は、一般的なヒトと変わらない成長速度に戻る。この「倍速成長」は、かなり役立つ技術である。

現在は4倍速程度だが、これが20倍速になれば、クローン人間を1年間で20歳にまで成長させることができる。ただし、これは身体年齢の話である。知能は1歳児のままだ。まずはここを改善する必要がある。

2007年 5月5日

脳に特殊な電磁波を与えることで、身体年齢に相応の知能を持ったクローンを作りだすことに成功した。現在の最高倍速は20。つまり1年で、20歳の人間と変わらないクローン人間を作成することが可能である。残るは、「ヒトを殺傷する能力」のみである。

2007年 8月27日

かなり惜しい線まで来ていると自覚している。あと少し、あと少しの辛抱だ。微弱電流の調整が、困難である。

2008年 9月23日

「ヒトを殺傷する能力を持つクローン人間」が、遂に完成した。長い闘いであった。クローン人間を作るのみならず、殺す能力まで開発できたことを、私は誇りに思っている。この情報は、きつと高く売れるだろう。私が欲しいのは金だけだ。次の研究テーマもすでに決めてある。この情報売り飛ばし、得た大金でまた新たな研究を始めようと思っっている。

売り飛ばす前に、今回の研究成果について軽く書き残しておこう。

ヒトを殺傷する能力。これはすなわち、「ヒトを自殺に追い込む能力」である。

私の作りだしたクローン人間には、手のひらに特殊な微弱電流が流れている。その手で、殺傷する対象の頭に触れるだけでいいのだ。この微弱電流は、頭蓋骨や脳漿を容易に貫通する。そして、脳内の特定のシナプスを攻撃する。

結果、セロトニンの再取り込みを活性化させ、さらにはレセプターの働きを……ここでは簡潔に書くが、要は対象を一瞬で鬱状態にまで追い込むのである。

クローンの手のひらに流れている微弱電流はさらに、違う神経伝達物質にも作用する。これにより、ヒトを極度の活動状態にさせる。

激しい「鬱状態」と「活動状態」が拮抗した場合、ヒトはどうか。狂い、果てには自決を選択する。すなわち私の開発した能力は、『対象を発狂させ、自決させる能力』と名付けるのが一番妥当であろう。

刃物や銃器などで、直接手を加えることなく人を死に追いやる。最高の人間兵器である。

一応書いておくが、この微弱電流はクローン自身には効かないように遺伝子操作を施してある。よって、この能力でクローン人間が

自決することはできない。

完成品は、N - 197。見た目はただの成人女性にしか見えない。そのうえ、彼女の顔立ちは整っており、スタイルも抜群である。

これほど華麗な人間兵器が、他にあるだろうか。

01 世界との繋がり方

それは、とても、簡単で。

私は対象の頭に触れる。ただそれだけでいい。あとは相手が、勝手に死んでくれる。私は自らの身体を返り血で汚すことなく、対象を始末することができる。

私の手に流れる特殊な微弱電流は、絶縁体ですら貫通する。そしてこの微弱電流は、自分の意志では止められない。たとえ私が分厚い皮手袋をしていたとしても、殺意がなかったとしても、この手でヒトの頭に触れれば、そのヒトは簡単に死んでしまうだろう。

それが、何を意味するのか。

眠っている男の頭に、軽く手を置いた。途端に、安らかだった男の寝顔がぐにやりと歪む。今頃、恐ろしい悪夢でも見ているだろう。私は自分の荷物をまとめると、部屋から抜け出した。

背後から聞こえるうめき声は、やがて悲鳴となるだろう。彼がどんな死に方をするのか、……死に方を選択するのか、私には見当もつかないし知りたくもない。

自分が生きるためには、ヒトを殺し続けるしかない。

私がヒトなのか、ヒトと呼べるのかどうか、私には分からない。

私はヒトの偽物で、ヒトを殺す生き物だ。

……本当は、悲しかった。

ヒトを殺す事ですが、世界と繋がってられない自分が。

02 常連客

2010年 8月

早く、辞めたい。

フロントから玄関の方を見つめながら、ぼつりとそんなことを思った。思っただけで、辞めるつもりはない。少なくとも、今は。

24時間営業がウリのこのカラオケ店は、仕事が楽な割に時給がよかった。特に深夜時給は、他のカラオケ店よりもかなりいいと思う。なのに深夜に来る客は少なく、暇を持って余せるといふ素晴らしさだ。今日だつて、入ってるのはたった3組。この店はそのうち潰れるんじゃないかと、かれこれ3年近く思っているが今のところ潰れる様子はない。

あともう少しの間、潰れなければ助かる。俺が辞めるまで潰れなければ。そのあとは別にどうなってもいい。このカラオケ店に、そこまでの愛着はなかった。

ピンポン

誰かが玄関マットを踏んだ音が鳴る。誰かが、というかお客様がドアが開いたせいで、湿気の強い生ぬるい風が俺の頬に当たった。冷房の効いている店内にいと分らないが、やはり今晚も暑いのだろう。そんなことを思いながらも俺は急いで営業スマイルを作り、客の方を向いた。

「いらっしやませ」

声をかけてから、あっ、と思う。見慣れた顔。つまり、常連だっ

た。

「おひとりさま、8時間、ドリンクバー付きでよろしいですか」

彼女がいつも言う注文を、彼女が注文する前に言ってみた。彼女はいつも深夜1時ごろにここにきて、朝の9時頃に出ていく。ここ2週間ほど毎日、これを繰り返していた。

「ええ、それでいいわ」

「この紙にご記入お願いします」

書いてもらわなくても、彼女の名前はもう覚えてるんだけど。

彼女が初めてここに来たときも、接客したのは俺だった。彼女が読みやすい走り書きで名簿に「野良」と書いたとき、俺は間違えて「やら」と読んだ。多分、高校時代の同級生の「屋良や」のことを思い出したんだろう。

「えっと……やら様、ですね」

「のら」

言いなおされてそこでようやく、「野良」は「のら」と読むのだと気付いた。

名簿には年齢を書く欄もあり、そこには「23」と書かれていた。思わず、彼女の顔を見る。年相応にも見えだし、それよりもっと若く、あるいは逆にも見えた。この人の顔は、いつ見ても何歳なのか分からない。本当に23歳なのかどうかも分からなかった。

顔はすごく整っていて、いわゆる美人だった。いや、超美人だった。きれいな白い肌、長いまつげの目立つ大きな目。高い鼻、形のいい唇。街を歩いたら、色んな男から声かけられるだろう。あるいは恐れ多すぎて、よっぽどの男じゃないと声なんてかけられないか

もしれない。少し癖のあるふわふわした髪の毛は、腰の高さまである。スタイルはモデル並みで、出てるところは出てるし、脚は俺の倍はあるんじゃないかと思うほど長い。

長袖のパーカーにジーンズという露出度の低い服装をしている今でも、そのプロポーションは目立っていた。身長は俺の方が少しだけ勝ってるけど、彼女が少しでも高いヒールを履いたら抜かされるだろう。ちなみに俺の身長は172cm、高くも低くもなく普通だ。

「突き当たりの21番ルームです」

マイクとおしぼりの入ったカゴを渡すと、彼女は慣れた手つきでそれを受け取り、21番ルームへと消えていった。

彼女の部屋から音楽が聞こえたことはない。ミュージック音量をものすごく小さくして歌っているか、あるいは全く歌っていないかのどちらかだと思う。歌っていないのだとしたら、彼女は何のためにここに来ているんだろう。

宿にするならうるさいカラオケ店よりも、マンガ喫茶やネットカフェの方がまだ、寝心地はよさそうなのに。

内線が鳴った。彼女のいる、21番ルームからだ。

「はい、フロントです」

「ホットコーヒー。あと、カルボナーラ」

今日はそうきたか、と思いながら受話器を置く。彼女はいつもルームに入った後、ドリンクと食べ物を注文してくる。しかし、同じメニューを頼んでくるわけではなかった。紅茶だったりコーヒーだったり、お茶漬けだったりポテトだったり。甘い物は頼んでこないで、どうも苦手らしかった。

冷凍のカルボナーラを電子レンジに放り込み、その間にホットコーヒーを注いで、出来上がったばかりのそれらを21番ルームへと持っていく。ノックして、声をかけながらドアを開けた。

薄暗い照明の中で、彼女はソファアームに足を組んで座り、煙草を吸っていた。これもいつものことだ。少し甘い匂いのする彼女の煙草は、俺の知らない銘柄だった。

「……みやけ」

カルボナーラを机に置いてみると、彼女が低い、けれども透き通った綺麗な声でそう呟いた。そして彼女が呟いたそれは、俺の名前だった。

びつくりして、思わず彼女の方を見た。彼女は無表情に、俺の目を見ていた。そしてこう続けた。

「名札」

「あ……」

なんで俺の名前を知っているのだろうと思っていたらそうだった、

名札を付けてるんだった。俺は恥ずかしくなった。自意識過剰にもほどがある。

「下は？」

「はい？」

「下の名前。なんていうの」

名札には、名字しか書いていなかった。

「あ、ユウです。優しい、の優」

「ユウ……」

彼女は煙草に口をつけて、吸って、煙を吐きながら

「いい名前ね」

「ありがとうございます」

ごまんという名前だと思うが、誉められると悪い気はしない。

彼女が食事を始めたので、俺はルームを出た。そういえば、彼女の下の名前はなんだっけ？フロントに戻り、カウンターの上にあった名簿をめくる。

彼女の名前を確認した俺は、固まってしまった。名簿には走り書きで、しかしはっきりとこう書かれていたのだ。

『野良 猫』

ノラネコ。まさか『のらびょう』ではないだろう。どうして俺は今まで気づかなかったんだ。これ、偽名じゃないのか。

俺は『野良 猫』が偽名かどうかを考えて、それからすぐに考えるのをやめた。

彼女が偽名を使っているんだとしても、特に問題なかったからだ。金は払ってくれてるし、ルームもきれいに使ってくれるし、常連だし。別に偽名を使ってるからって追い出す必要もないだろう。

というのは表向きの理由で、実際のところ俺は、彼女に会えなくなるのがさみしかった。

彼女以外の客は、朝の5時ごろに次々退室していった。そしてそれから、客が入ってくることはなかった。この時間帯が一番暇なのだ。とりあえず、店内の掃除をして時間をつぶす。そして9時ごろ、俺はようやく店を出た。

店を出たら、あいにくの雨だった。雨の所為で湿気の強くなった鬱陶しい空気が、肌にとわりつく。俺は折り畳み傘を探すために鞆を開けようとした。ちょうどその時

ピンポーン

店のドアが開いて、中から彼女が、…野良さんが出てきた。彼女は濡れたアスファルトを見てから、空を見上げた。そして、浅くため息をついた。

「……傘、持ってますか」

そんな彼女の様子を見て、思わず声をかけてしまった。彼女は、隣に俺がいたことに最初から気づいていたのかいなかったのか、ちらりとこちらに目をやって、それからかぶりを振った。

「持っていないわ」

そう言うと彼女は、自分の鞆の中に手を突っ込んで何かを探し始めた。携帯でも探しているのかと思ったら、彼女が取り出したのは携帯ではなくて煙草の箱だった。しかし中身が切れていたらしく、その箱は握りつぶして鞆にしまい、新しい箱を探し始めた。俺は何となく、その様子を見つめる。ふと、彼女と目があつた。

「……あなた、今から家に帰るの？ 家はどっちの方向？」

彼女の言いたいことは分かった。俺はできるだけ明るい声で、答える。

「虎野駅の方です。よかったら、傘、入っていきますか」

彼女はにこりと笑って、ありがとうと言った。

ドアを開けると、古い畳のにおいがした。雨の日はこのにおいが強くなる気がする。そして俺は、このにおいが嫌いじゃない。

6畳一間の風呂付ボロアパートは、一人暮らしの俺にとっては十分だった。線路沿いという立地の悪さのおかげで、家賃は格別に安い。親からの仕送りがなくても、特に不自由なことはなかった。

「……ただいま」

返事はかえってこないと知っているが、帰宅するたびにこの言葉を言うのが癖になっていた。返事は待たずに靴を脱ぐ。玄関も部屋の一部みたいになっていて、はじめてこの家に来たときは玄関がないんじゃないかとさえ思った。

家具などは必要最低限しか揃えていない。冷蔵庫も、小さいツードアタイプ。料理しない俺にとってはそれで十分だった。ちなみに冷蔵庫の中は飲み物ばかり。

部屋に入ると、古い畳がきしんだ。ガラスがガタガタ鳴る音。すぐそばを通る電車の音。もう、どれもこれも聞きなれた音だ。

俺は万年床にどさりと倒れこんで、ぼんやりと彼女のことを思い出した。

駅まで一緒に歩いた俺と彼女は、はたから見たら相当不釣り合いなカップルだっただろう。彼女は綺麗すぎる。そして俺は普通すぎる。年齢は彼女いない歴の俺が、あんな美人と歩くなんて誰が想像しただろうか。

俺は背格好も、顔も、極めて普通だった。普通すぎて特徴がない。

高校時代の同級生で、俺のことを覚えてる奴なんてほとんどいないだろうと思う。学生時代、誰とも話さなかったわけではなく、むしろいろんな人間と話した。ただ、特定の誰かと仲良くすることはなかった。わざと、親しい人間を作らないようにしたからだ。

誰の記憶にも、残らないように。

彼女は、と考える。彼女はいつたいどんな人間なのだろうか。

「一人じゃない感じがするから」

彼女がそう答えたとき、俺は彼女に何を訊いたのか、頭の中で思いだそうとした。俺は確か、

「なんで毎晩うちの店に来るんですか」

と、訊いたはずだ。この質問の前には、歌うのが好きなんですかと訊いた。答えは案の定、ノーだった。やはり彼女は歌っていないかったんだ。

一人じゃない感じがするから。それが、カラオケ店に来る理由。

俺は分からなくて、思わず首をかしげた。そんな俺の様子を見て、彼女は眼を細めて笑った。そして続けた。

「いろんな人の歌が、声が、聞こえるでしょう。それに、悲しそうな声よりも、楽しくてうれしそうな声の方が多いわ。だから気に入っているのよ」

「やかましくはありませんか」

「まあ、子守唄にするには少し大きいわね。でもいいのよ」

彼女は言葉を切ってから、小さな声で呟いた。

「一人じゃない感じがするから」

いつも一人でうちの店を訪れる彼女は、孤独を恐れているんだろうか。そんな風にはちっとも見えないし、彼女がその気になれば彼氏になりたい男なんてそれこそいくらでもいるはずだ。いや、すでにいるのかもしれない。あの美貌なのだから。

俺はここで思考を止めて、立ち上がった。のそのそと風呂場へ向かい、体育座りしないと入れないような小さな浴槽に熱い湯を張る。狭い浴室は、あつという間に視界が白くなった。

脱いだ服を洗濯かごの中に乱暴に投げ、脱衣所にある鏡の中を覗いた。

そこにはいつも通りの、俺の姿があった。俺はその姿に言い聞かす。毎日、毎日。

俺は、独りで、いいよ。

05 ガラスの向こう

俺は基本的に、ヒトが嫌いじゃなかった。いや、むしろ好きだった。だからこそ、人と深く関わりあいたくなかった。

カラオケ店の店員は、接客業だ。だけど、そんなにみっちり接客するわけじゃない。お客様を部屋にお通しして、ドリンクや食べ物を持って行って、お会計をする。その程度の接客。人には軽く触れるけど、深くは触れない仕事。そして時給は悪くない。だからこそ、俺はこの仕事を気に入ってるんだ。とか、ごちゃごちゃ考えてる俺は、なんだかんだでただのフリーターだ。

その日の仕事は遅番で、夜の11時から翌朝の9時までのシフトだった。休憩時間が短いのがきついが、客は大して入ってこないのが楽な時間帯だと思う。

遅番の多い俺は、ほとんど昼夜逆転したような生活だった。昼から夕方にかけて寝て、それから出勤する。昼夜逆転した生活は身体に悪いと聞くが、そんなのは別にどうでもよかった。

腹も減ったし、眠る前に何か食べよう。俺はフラフラと冷蔵庫に近づいてから、冷蔵庫の中には飲み物しか入ってないことを思い出した。

外から聞こえる、暑苦しい蝉の鳴き声。

「……外に出るの、面倒くさいなあ」

けれど、腹が減っている。俺は食べ物を買うために、しぶしぶ外へ出た。

「暑い」

思ったことをそのまま口にしてみる。しかし俺が独り言を言ったところで、涼しくなるはずもない。蒸し暑く、日陰もない道路にうんざりしながら、駅前のコンビニに向かった。

「いらつしゃいませー」

間延びした店員の挨拶と、冷房のきいた店内の空気にほっとする。俺は真つ先に弁当コーナーに向かおうとして、いつも読んでいる週刊誌の発売日が今日だったことを思い出した。ドアの近くにある雑誌コーナーに向かい、「本日発売」のプレートが立てられている雑誌を一冊手に取る。ガラス張りのせいで、雑誌コーナーは少し暑いな。そう思いながら顔を上げると、ガラスの向こう側を彼女が、…野良さんが歩いているのを見つけた。

彼女は見知らぬ男と歩いていた。男は、一言で表せば男前だった。彼女とよく似合っている。釣り合ってるともいう。ああ、あれが彼女なのかな、とぼんやりと思った。

彼女は笑っていた。ただ、あまり楽しそうではなかった。男の方は楽しそうだった。というか、男の俺から見ても下心が丸見えだった。彼女の腰に添えられた男の手が、それをことさらに強調しているように見える。

俺は手に持っていた雑誌を元の位置に戻すと、何も買わずに急いでコンビニから飛び出した。「ありがとうございましたあー」と、やる気のなさそうなコンビニ店員の声が背後から小さく聞こえた。

バレないように注意しながら、彼女たちの後ろをこっそりと歩く。

彼女の行方が気になったからだ。

だいたいの予想は、ついていたけれど。

やはり、というか。彼女は、近くにあるラブホテルに吸い込まれていった。

06 電気椅子

男がおいしそうにチョコレートパフェを食べている様子を、私は作り笑いをしながら眺めていた。彼はタワーのように細長い容器に盛られた生クリームやコーンフレークを、柄の長いスプーンを使って器用に食べている。

「おいしい？」

私が訊くと、男は満足そうに頷いた。

「美味しいよ。お前も頼めば良かったのに」

「甘いものは苦手だから、いらない」

彼は「ふーん」と関心があるのかないのかよく分からない返事をして、それからチョコレートアイスをつつき始めた。私はファミレス独特の、安っぽいコーヒーに口をつける。

平和な男だ、と思う。もうすぐ自分が死ぬなんて、この男は想像すらしていないだろう。

パフェに乗っていたミカンが、バランスを崩して机に落下した。それを見て男は「もったいない」と騒いでいる。私はそれを、ほほ笑みながら眺める。

この男がなぜ死ななければならぬのかは、知らない。知ろうとも思わない。

殺せと命令されたから、殺す。

それが私の仕事だから。

それだけ。

「お前はさ」

男が、コーンフレークを咀嚼しながら話す。

「なんか……不思議だよな」

「そう？」

「人を寄せ付けない感じがするっつーか。美人だからかなあ」

平和な男だ、と思う。それと同時に少しだけ勘が鋭いな、とも。

「もしも、」

何度繰り返したか分からない質問を、私はまた繰り返す。

「もしもあなたの目の前に電気椅子があるとして」

「電気椅子って、あの、処刑に使われるやつのことか？」

唐突な質問に、男がポカンとする。私はうなずいた。

「そう。その電気椅子が目の前にあるとして、『今、電気は通っていません。安全だから座ってみてください！』ってすすめられたら、座る？」

男はぽかんとした顔のまま硬直した後、げらげらと笑った。

「なんだその質問」

「いいから、答えて」

私が真剣な顔で言っていると、男は肩をすくめてウエハースを一口かじった。それから

「……ま、座らねえだろうな。いくら安全だって言われても、気持ち悪いだろ。もしも本当に、その電気椅子に電気が通ってないとしてもさ」

へらへら笑いながら男が言ったその答えを聞いて、私も笑った。

「でしょうね」

「なんだ今の質問」

「なんでもない」

男に断りもせず、私は煙草に火をつける。男は首を傾げながら、チヨコレートパフェを食べるといふ仕事に戻った。私は煙草の煙をゆっくりと吐き出し、その行方を目で追いながら呟く。

だから私は、人を寄せ付けないのよ。

07 チョコレートパフェ

ラブホテルへ入っていった彼女の後ろ姿を思い出しながら、冷凍食品の在庫確認という地味な仕事をしていたら、玄関マットが鳴った。時刻を確認すると、午前1時前。一瞬だけ、出たくないと思った。

フロントへ向かい、客の姿を確認する。やはり、彼女だった。ただ、いつもと様子が違う。俺にだけそう見えたのかもしれない。タンクトップに長袖カーディガンを羽織った彼女は、何故かさみしそうに見えた。そして少しだけ、ほんの少しだけ充血した眼。……いらっしやいませ」

自分の声が予想以上に低くなったことに、自分で焦った。今は仕事 중이다。営業スマイルと機嫌のいい声に切り替えて、続けた。

「いつもの通りでいいですか？」

「ええ」

彼女の声はいつもの通り、透き通ったアルト。だけどその声は、少しだけ震えていた。

ルームに通してしばらくしてから、内線が鳴った。

「ミルクティー。それから、チョコレートパフェ」

驚いた。彼女が甘い物を頼んできたのは、これが初めてだったからだ。そして、緊張した。

俺は、チョコレートパフェを作るのが下手くそだった。

なんとか出来上がったいびつなチョコレートパフェとミルクティ

ーを持つて、彼女の部屋へと向かう。彼女の向かいの部屋から、せわしないタンバリンの音と、音程なんて気にしていないような歌声が聞こえてきた。確かこの部屋には、大学生の男女混合6人組を入れたはずだ。相当盛り上がりつつあるんだろう。皆でサビを大合唱している声が、廊下に大きく響いている。これだけの大音量なら、彼女の部屋にも聞こえているはずだ。

楽しそうなのこの声を、彼女は今一人で、どんな思いで聞いているんだろうか。

ノックをして、声をかけてからドアを開ける。彼女はソファアに座って、煙草を吸っていた。それはいつもと同じ。だが、彼女の座り方はいつもと違った。俺がアパートの風呂に入る時みたいに、ソファアの上で体育座りをしている。一瞬注意するべきかと思っただ、ブーツは脱いで、ソファアの下に並べられていた。煙草を持っていない左手は、膝を抱えている。

「甘い物も、食べるんですね」

ドリンクとパフェをテーブルに置きながら、声をかけてみる。目の前に置かれたいびつなチョコレートパフェを見て、彼女は苦笑いした。

「嫌いなんだけどね」

だったらどうして注文したのか。自分の不得意なチョコレートパフェを作った労力はいつたい何だったんだ、という意味不明の感情に襲われた。

そんな俺の気持ちなんて知らないであろう彼女は、ぼつりと呟いた。

「いま食べたら、どんな風を感じるかなって」

それがどういう意味なのか、俺にはよく分からなかった。

その日、彼女が店を出て行ってからすぐに、俺の勤務も終わった。急いで店から出てみたが、やはり彼女の姿はなかった。もしかしたら彼女に会えないか、と思っていた。そしてあわよくば、少しだけでも話せないか、と。彼女のことを、もっと知りたかった。

自分はどうして、ここまで彼女のことを気にしているんだろう。もしもこれが、

もしもこれが恋愛感情なら、俺はさっさと捨てるべきなのに。

08 人殺し

人殺し、と初めて言われたのはいつだっただろうか。

これを考えるとすぐに、母の葬儀の様子が頭に浮かぶ。多分、最初に言われたのはその時だったんだろう。

遺影の中でほほ笑む母。黒い参列者。嗚咽。一定のリズムを刻んで鳴り続ける木魚とお経。俺のことを見る大人の眼。同情。憐れみ。そして何度も言われる言葉。

「まだ小さいのに、かわいそうに」

白い顔をした母は眠っているようで、しかもう息をしていなかった。首元に残る、青紫の線。それを隠すように、棺の中を埋め尽くす白い花。その白い花の所為で、母の顔はますます白く見えた。それはまるで、陶器でできた人形のように。

当時5歳だった俺は、ほとんど何も理解していなかった。

「おかあさんはしんだ」

それを父から聞かされた時も、分かっているようで分かっていた。なかった。

退屈で、しかもよく分からないお経を聞きながら下を向いて、俺は母の最期の姿を思い出そうとしていた。幼稚園のリュックを渡し

てくれた手。細い指。鈴を転がすような声で「いつてらっしやい」と言った母は、あの時笑っていただろうか。

友達と夕方まで遊んでから帰宅した俺は、いつものように大きな声で「ただいま」と言った。だが、返事がなかった。そのことにまず不安になった。いつもなら、母が「おかえり」と返してくれていたからだ。

玄関で靴を脱いで、まずリビングへと向かう。しかし、誰もいない。綺麗に片づけられたリビングにある机の上に、封筒が置かれていたことにはその時気付かなかった。

とりあえず自分の部屋にリュックを置きに行こうと、階段を上がった。2階の廊下に出てみると、両親の寝室のドアだけが半開きになっているのに気づいた。母は、あそこにいるのだろうか。

……見てはいけない。

なぜかその瞬間、直感的にそう思った。あの部屋の中は見えてはいけない。

しかし、母が家にいるのだとしたら間違はなくあそこだ、とも思った。寝ているのかもしれない。母は頭痛持ちで、たびたび寝室で休んでいた。俺はベッドに横たわる母の姿を想像しながら、ドアの隙間から部屋を覗いた。

母は、やはり部屋の中にいた。だが、ベッドの上ではなかった。

天井から伸びてきたような、茶色の縄。少しだけ揺れる、だらりとした母の身体。床についていない、足。

母の、顔は、

「人殺し」

低い声で、憎しみをこめたようにそう言った。響くお経。漏れる
嗚咽。俺は顔をあげた。

人殺し、と呟いた父は、俺の方を見ていた。真っ赤に充血した眼。
震える唇。血色の悪い肌。

俺は、人殺しの意味を考えた。ひとごろし。ひとごろし。……ヒ
トゴロシ？

「おとうさ「黙れ」

低く唸るような声で父は俺の声をさえぎり、母の遺影を見た。透
明のしずくが、父の頬を伝う。それから、もう一度こちらを向いた。
先ほどよりも、憎しみのこもった目だった。

「おまえが殺したんだ、お前が、」

俺が、母を、殺した。

家電量販店のディスプレイの前で、俺は足をとめた。俺の家には
テレビがない。新聞も取ってない。ラジオを聴くこともない。だか
ら俺は、世間のことにひどく疎かった。政治はおるか、今流行って
いるものさえほとんど知らない。もちろん、刑事事件のことも。

量販店のディスプレイにある大型テレビのモニターに、見慣れた
風景が映っていた。現代の建築物から、ひどく浮いたような造りの

建物。まるで、ファンタジーに出てくるお城のような。名前は伏せられているが、俺はそのホテルの名前を知っていた。この近所だったからだ。

画面が切り替わり、先ほどまで画面の右上に小さく写っていた男の写真と名前がアップされた。

俺は、その男の名前を知らなかった。しかし、顔ははっきりと覚えていた。整った顔で、彼女と釣り合っていると思ったその顔。彼女と、城のような造りのホテルに入っていたその顔。

その顔の下に無機質なゴシック体で、死亡、と書かれていた。

遺体が切り刻まれていたこと。その遺体が、ナイフを握っていたこと。ただ、遺体の発見場所がラブホテルであったりと、自殺には不自然な点があること。

「警察は自殺、他殺の両面で捜査を進めている」

彼と一緒にラブホテルへ入っていく、彼女の姿。

人殺し、という単語が頭に浮かんだ。

その日は、俺にとっては貴重な休日だった。なのに、俺はバイト先のカラオケ店に来ている。もちろん、仕事をするためではない。俺は外装のはがれかけている外壁にもたれかかって、彼女のことを待った。藪蚊が俺のまわりをしつこく飛び回る。俺はそれに耐えながら、彼女が来店するのを今か今かと待っていた。

彼女と話がしたかった。もちろん事件のことも訊きたいが、それを訊くのは彼女の弱みを握ってると言っているようで気が引けた。どうしても、彼女のことを知りたかった。彼女の独特の空気に、俺は共鳴してるのかもしれない。あるいは

「野良さん！」

彼女の姿を見た瞬間、反射的に名前を叫んでいた。思ったよりも大きな声が出てしまい、内心で焦る。彼女は驚いた顔でこちらを見た。

「……………三宅君、だっけ」

彼女が俺の名前を覚えてくれていたことが、何となくうれしかった。「だっけ」は聞こえなかったことにする。

「ここで何してるの？ バイトは？」

紺色のTシャツに色あせたジーパンという私服姿の俺を見ながら、特に興味なさそうな声で彼女はそう言った。しかしその疑問はもつともだ。これは、下手すればストーカーと言えなくもない。ここに来て俺は、ここに立っている言い訳を考えていなかったことに気付いた。慌てて「今日は休みなんです」と素直に言ってしまったあとで、しまったと思う。今ちようど仕事あがりなんです、と言えばまだ自然だったのに。

そんな俺を見ながら、彼女は何かを考えているようだった。ふうと、ため息のように息を吐いて、それから笑っているような、なのに悲しそうな顔をして言った。

「殺人事件の、ことでしょう」

彼女の発言に、息をのんだ。彼女は悲しそうな顔で、続ける。

「彼と私が歩いてるの、あなた見てたでしょう？ 気付いてないと思ってた？」

気付かれてないと思っていた。俺は馬鹿じゃないのか。これじゃ本当にストーカーで、殺人事件をダシにして強請りにきたみたいじゃないか。

しかし彼女は、俺の沈黙を別の意味でとらえたらしい。

「口封じのために、あなたを殺すつもりなんてないわ。……あの事件は、『自殺』として片付けられるだろうしね」

彼女は何を言ってるんだろうか。俺が警察に彼女のことを通報したら、彼女は重要参考人として調べられるだろう。それに、他殺の線が強くなる。なのになんで、そんなことを。

彼女はもう一度ため息をつく、いつも通りの透き通ったアルトで囁いた。

「ここじゃ暑いわ。中で話さない？」

「中って……」

それはやはり間違いなく、俺のバイト先のカラオケ店のことだった。

よりもよって、フロントにいたのは店長だった。俺の顔と彼女の顔を交互に見て、ぎょっとしたような、あっけにとられたような、

そんな顔をする。店長もちろん、この「超美人の常連客」のことは知っていた。あんな女と付き合える男は幸せだよなあ…と、いつも言っていた。店長の頭の中で、俺は彼女の彼氏になったのかも知れない。店長は憮然とした態度で、名簿を突き出してきた。

彼女が何もしようとしないので、俺は名簿に自分の名前を書く。

「8時間、ドリンクバー付き……で、いいですよね」

彼女は答えない。気まずい空気の中、マイクの入ったカゴを受け取る。

ああ。後日、店長から根掘り葉掘り聞き出されるだろう。その時なんて言い訳をしよう。

ルームに入ると、彼女はいつものように足を組んでソファに座った。俺はその向かいに、少し縮こまった姿勢で座る。見慣れたカラオケルームが、なぜかものすごく狭く、そして空気が薄いように感じられた。

彼女が、慣れた手つきでドリンクメニューを取り出す。

「何か頼む？」

緊張のせいかな、喉がカラカラだった。コーラ、と俺が言うと、彼女は壁に備え付けられている受話器を持ちあげて、コーラとホットコーヒー、それから山盛りポテトを注文した。

内線を切ると、彼女はちらりとこちらを見た。それから

「煙草吸っていい？」

「あ、どうぞ」

ライターと煙草を取り出して、吸い始めた。俺は自分のそばにあった、くすんだ銀色の灰皿を彼女の前へと置く。

「ありがとう。……で、何か聞きたい？」

何からと訊かれても、訊きたいことが多すぎて絞れない。それに、そんなに簡単にいるんなことを話してもらっていいのだろうか。

「……野良さんは、」

「それ、本名だと思ってる？」

意を決して訊こうとしたら訊き返されてしまい、肩透かしを食らった。しかし、それも訊きたかったことの一つだ。

「本名じゃないんですか？」

「本名だと言えば本名だし、違うと言えば違うわ」

訳が分からない。彼女は言葉遊びでもして、すべてをはぐらかす気なんだろうか。

「ないのよ」

困惑顔の俺に、彼女はほほ笑みながらはつきりと言った。そして、煙草に口をつける。煙を吐く。その流れに、言葉に乗せた。

「私にはね。名前が、ないの」

私には、名前がない。

彼女がそう言ったところで、部屋のドアがやや乱暴にノックされた。入ってきたのはやはり店長で、コーラを俺の前に、コーヒーを彼女の前に、ポテトをテーブルの真ん中に置いてから、怖い顔で俺の方を睨んだ。それから笑顔で彼女の方を向き、やっぱり釈然としない顔で部屋から出て行った。

「……何か、勘違いされてるみたいね」
何でも無いような声で彼女は言った。

彼女は砂糖もミルクも入れずに、コーヒーを一口飲んだ。それからカップをソーサーに戻して、「どこまで話したっけ」と呟いた。
「名前が、ないって」

俺はそこまで言っただけで、自分のコーラに手を伸ばさず。店長が嫌がらせに、何か変なものを混ぜてるかもしれないと思ったが、普通のコーラだった。安心して、半分以上一気に飲み干す。

「ああ。そうだったわね」
彼女は2本目の煙草に火をつけ、ポテトに手を伸ばしながら言った。

「私には名前がない。戸籍もね。この世には存在しないことになってる」

一気にいろんな情報が流れ込んできて、飲んでいたコーラが喉に詰まったような感じがした。名前がない。戸籍も？ それって、どういっ……

「私はね、クローン人間なのよ。そして仕事は、ヒトを殺すこと」

この言葉を聴いて、俺の頭は完全にフリーズした。クローン人間で、人を殺す事が、仕事？

必殺仕事人、という場違いなようなそうでもないような単語が頭に浮かんだ。

彼女は自分の手のひらを、こちらに向けた。

「ここに特殊な電流が流れてる。そして、この手で頭に触れられた人間は、死ぬ。自殺するの。……原理は私にもよく分からないけど」
彼女とホテルに入っていった男の顔と、死亡という文字が頭に浮かぶ。

「まあ自殺といっても、私が殺すようなものだけど」
思わず、彼女の手のひらから離れるように後ろにのけぞった。

夢を見てるみたいだった。いや、夢の話をしているみたいだった。彼女とこうやってカラオケルームの個室に二人きりであることは夢のようだが、話している内容はまるで非現実だ。

名前がない？ 戸籍がない？ クローン？ 人を殺す事が仕事？

彼女の話した内容を何度も反芻してみるが、それはまるでちっとも混ざらないココアの粉のように、俺の頭の中をぐるぐるとめぐるだけだった。

彼女はと言えば、そんな俺のことはどうでもいいと言わんばかりに、ポテトに夢中である。うちの店のポテトはもちろん冷凍だが、おいしいと評判だ。某ハンバーガーチェーン店を思わせる細長いフオルム、サクツとした食感、程よい塩加減。まあ、塩は店内で店員

が振っているのだが。

「 科学者に作られたクローン人間なのよ、私」
指についた塩をなめながら、彼女は話し始めた。

「それでその科学者は金目当てで、私と、私を作る方法をとある犯罪組織に売り飛ばした。私はその組織から、ヒトを殺すことを命じられる。それをこなせば、お金がもらえる。殺す方法は簡単で、ターゲットの頭に触れるだけ。そうすればあとは勝手に、ターゲットが自殺してくれる」

平然とホットコーヒーを飲む彼女とは対照的に、俺は動揺を隠しきれていなかった。話に全く付いていけてないし、どこで突っ込みばいいのか分からない。隣の部屋から流れるアップテンポの曲の方が、非現実な気さえしてくる。

気付けば、ストローをくわえたままだった。慌てて口を放し、ほとんど中身のなくなったグラスを机に置く。

「頭に触れただけで人を殺せる存在、なんて誰も考えないでしょう？ 結果、ただの自殺として事件は片付けられる」

彼女はどこまでも無機質に、まるで国語の時間の音読のようにすらすらと、棒読みで語った。表情も、声のトーンも変わる様子はない。

「……どうしてその組織は、あなたに名前を付けなかったんですか」
気付けば変な質問をしていた。しかし普通、名前くらいつけるじゃないか。

「名前を付けてしまえば、それに愛着がわいてしまうからよ。組織にとって私は、どこまでもただの殺人道具なの」

彼女が自嘲気味に笑った。その顔は、やはり綺麗だった。

「簡単よ。すこし甘い言葉で男を黙らせて、頭をなでるだけ。それだけで、みーんな死んでいく」

無言のまま考えこんでいる俺の方を見て、彼女はほほ笑んだ。

「さて、何か質問ある？」

何も思い浮かばない。俺は必死になつて頭を回しながら、ポテトに手を伸ばした。自慢のポテトはすっかり冷めて、ぐんにやりとしている。

「……どうして、」

途中から思っていたことを、口にした。

「どうして俺に、そこまで教えてくれるんですか」

頭の隅で警鐘が鳴っていた。もしかしたら俺は、このまま殺されるかもしれない。俺の身体は明日の朝には、切り刻まれているかもしれない。しかも、自分の手で。

6畳一間のアパートのことを思い浮かべた。大して片付いていないあの部屋が、俺の部屋としての最後の風景になるかもしれないんだ、と。

彼女は頬杖をついた。笑っているような、困っているような表情で囁いた。

「怖い？」

俺は一瞬驚いて、だけど即答で

「いいえ」

怖さなんてものはなかった。だって俺は、

「だから、よ。あなたさ、死ぬ気でしよう？」

雷に打たれたようなショックに、いや、実際に打たれたことはないけど、とにかく俺は眼を見開いたまま固まってしまった。隣の部屋から、数年前にヒットしたアイドルグループの曲を大合唱する声が聞こえる。場違いも甚だしいと思ったが、隣の部屋とこちらの部屋、どちらが場違いなのか。

「私にはね、分かるの。あなたとは最初に会ったときからそうだろうと思っただわ」

彼女は冷めてぐんにやりとしたポテトに手を伸ばしてそれを食べ、残念そうな顔をしながら言った。

「いくら笑っててもね、目が死んでるの」

自分の貯金を、葬儀代だと考えたのはいつからだろうか。俺は人殺しだ、だから死ななくてはいけない、と頭の隅でいつも考えていた。高校までは補助してやるが、そこからは一人で生きると父に言われ、俺はフリーターになる道を選んだ。フリーターとして出来るだけ働いて出来るだけ稼いで、早いうちに自殺しよう。

このカラオケ店は、とても時給がよかった。だから選んだ。早く辞めたくて、……死にたくて仕方がなかった。だけど葬儀代が貯まるまでは、死んではいけないんだと言い聞かせていた。

「あなたは どうして死にたいの？」

彼女の透き通ったアルトが、俺を現実世界へ呼び戻した。

「俺は……」

どこまで言うべきか。何を言うべきか。何を隠すべきか。

「俺は、人殺しだから」

母が自殺したその原因は、いわゆる育児ノイローゼだった。人付き合いが苦手だった母は、保護者同士の関係にも苦労していたらしい。俺はといえば甘えん坊のくせにやんちゃ坊主で、しょっちゅう他の児童と喧嘩をしては、相手を泣かせた。そのたびに母は相手の家に謝りに行く羽目になった。

それなのに母は、怒るということをしなかった。人付き合いだけではなく、怒るのも苦手な人だったからだ。「相手の子がどれだけ痛かったか考えようね」と、いつも穏やかな口調で俺を叱った。だ

が、怒られなかったことで、俺はかえって調子に乗った。

「あそこの子供は本当に乱暴で」

「そうやってだんだんと俺の、……いや、

「一体どういしう躰しをしてるのかしら」

俺の保護者、要するに母の評判は悪くなっていった。

そして、それに耐えきれなくなった彼女は、首を吊った。

リビングの机に置かれていた手紙には、「疲れた。ごめんね」とだけ書かれていたそうさ。

俺は大きくなればなるほど、彼女が死んだその訳を理解した。あ

あ、だからあの時。

母の葬儀の時、父は俺に「人殺し」と言ったんだ、と。

父と二人で暮らす家の空気は、常に薄くて重くてひんやりとしていた。父が帰宅するのは、いつも深夜。出掛けるのは早朝で、俺が目覚めた時には既に家にいない。そんな生活を、何年続けただらう。

俺は帰宅するたびに、「ただいま」と言った。しかし返事が返ってくることは、もう二度となかった。

遺影の中の母は、いつまでもこちらに向かつてほほ笑んでいる。だけどきっと、俺を許してくれることはないだろう。俺が死ぬまで、

ずっと。

俺は、人を特別好きになることをやめた。深く関わることをやめた。

俺と関わったことで、誰かが死んでしまうなんてことは、二度とごめんだったから。

「……つまり、私は死んでも良かったってわけだ」

と言う彼女の声にハツとした。気付けば全部、声に出して話していた。

「ち、」

違いますと言いかけた俺は、向かいのソファーに腰掛けていたはずの彼女が、いつの間にか俺の隣にいることに気付いた。それから「え……」

自分が泣いていることにも、ようやく気付いた。人前で泣くのは、母の葬儀以来だった。

隣の部屋から、こちらの空気でも読んだかのようにバラードが流れ出した。気付けば話すことに夢中になりすぎて、感情を抑えることを忘れていた。俺の眼からはららと落ちる涙を、彼女はまるで綺麗な宝石を見るような眼で見っていた。

「あなたは、」

と言いかけて言葉を切り、ポケットからハンカチを取り出した。

「勘違いしているのかもしれない」

「……なにを」

普通に声を出すつもりが、ガタガタに震えた間抜けな声が出てしまった。肩の震えが止まらない。涙も。

「あなたのお母さんは、あなたを怨んでいるのかしら」
怨んでるに決まってるだろう。だって、

「あの人は死ななかつた。俺がもつといい子供だったら。誰にも迷惑をかけないような子供だったら。母の弱さに、気付いてあげられるような子供だったら……」

「5歳やそこらの子供に、そこまで分かれって言う方が無茶よ。それにきつと、すべてがあなたの所為じゃない」

「だけどっ……」

「あなたは死にたいの？」

「っ……」

言葉に詰まってしまった。死にたいか、だって？

「俺は……」

いつも死ぬ方法を考えた。死ぬ時を考えた。葬儀代を貯めた。俺は、

「死ななきゃいけない。って思ってるんじゃない？ 死にたいじゃ、なくて」

俺は眼を見開いて、彼女の方を向いた。彼女はさっきと同じようにほほ笑んでいる。

「母親を殺したのは自分で、そんな自分は死ななきゃいけないって、そう思ってるんじゃないの？」

俺の頭が、考えるのをやめた。いや、いろんなものが絡み合って、何を考えているのか分からなくなった。

「あなたのお母さんは、あなたが死ぬことを望んではいない。もしもあなたを怨んでるなら、あなたを殺したはずよ。だけど彼女は、自分が死ぬことを選んだ。何故だと思っ？」

答えは、頭の中にすぐに浮かんだ。だけど、それを声に出すのは怖かった。

「あなたには、生きていてほしかったからよ」

俺の言えなかったそのセリフを、彼女は優しい声で、囁いた。

何か飲む？と訊かれて、アイスココアと答えた。泣きやんだものの、とにかく混乱していた。

人を殺すことが、仕事。

彼女は自分のことを、淡々と語った。一方の俺はこのありさまだ。

ドリンクを注文して内線を切った彼女は、俺の横ではなく、向かい側に腰かけた。テーブルの上を見ているようで見ていない、どこを見ているのかわからない目をしていた。

「あなたはね、まだ引き返せるわ」

そのままの目で、彼女が呟くように言う。

「まだ引き返せる。あなたのことを愛してくれる人も、必要としてくれる人も、この世界にはきつといる。自分から一人になる必要なんてない。そんなさみしい思い、自分からしなくていいのよ」

彼女の言葉を聞いて、ああ、と思った。ああ、だから俺は、

その時、乱暴なノックの音がゴンゴンと室内に響いた。

「失礼します」

満面の営業スマイルでココアとレモンティーを持ってきた店長は、「おまけです」と言って、ポッキーの載った皿をテーブルの真ん中に置いた。それから俺の方を見て、ぎよっとした。

俺の顔に何かついてるのか？と思ってから、さっき泣いたことを思い出した。相当ひどい顔をしていたんだろう。それを店長がどう

捉えたのかは知らないが、彼女と俺の顔を交互に見比べて、にんまりしてから部屋を出て行った。一体あの人は何を想像したのだろうか。

「別れ話をしているとでも思われたのかしら？」

俺もそうだろうと思っていたことを、彼女の方が先に口にした。

テーブルの上のポッキーを見て、俺は苦笑する。彼女が甘い物をほとんど食べないということを、店長は知らないのだろうか。

おそらくは彼女のために用意したのである。ポッキーを、俺はつまんだ。少し苦いチョコレートの味が、口に広がる。

ポッキーを食べながら、彼女の方をちらりと見る。彼女はレモンティーに口をつけて、すぐに放した。どうも熱すぎたらしい。店長め、ざまあみる。と、餓鬼のように思った。

何となく、沈黙が続く。隣で流れている曲は、俺の知らない曲だった。やたらと甲高い声で、悲鳴を上げるように歌っている。正直、聞き苦しい。

「どうなっただっていいんだ。私なんか、ね」

彼女がふいに呟いた。俺が彼女の方を見ると、彼女はああ、という顔をした。

「隣で流れてる歌の歌詞よ」

「この曲、知ってるんですか」

「ええ、まあ。……悲しい女の子の歌」

隣から聞こえる金切り声は、とてもじゃないが悲しそうには聞かえない。彼女の呟いた声の方が、よっぽど悲しそうだったと思う。熱々のレモンティーと格闘している彼女に、俺は言った。

「あなたは、どうなんですか」

彼女は、レモンティーから俺の方へと視線を動かす。それから、訊き返した。

「なにが？」

「あなたは今の自分のことを、どう思ってるんですか」

「どうって……」

彼女はレモンティーを飲むのを諦め、ソーサーの上に置いた。よほど熱かったらしい。後で店長に報告しよう、と頭の隅で思う。

「別に何も。これが私にとって普通だから」

「名前や戸籍がないことも？」

「ええ」

「殺人道具として使われていることも？」

「ええ」

「ヒトを殺すとき以外、誰とも接しないことも？」

「私にとっては普通よ。もう今更、何も感じないわ」

「嘘だ」

思わず断言してしまい、内心で焦った。彼女はぼかんとしたような、不意打ちでも食らったかのような顔でこちらを見ている。断言してしまった、と思ったものの、俺は本当にそう思ったんだから、それを伝えるしかない。

「あなたの目が、声が、さみしいって言ってる」

だから俺は、彼女に惹かれたんだ。孤独と、その辛さを知る彼女に。

彼女は煙草を取り出して、火を付けた。それから、カラオケのディスプレイを眺める。ディスプレイには今の流行歌が次々に流れ、その流行歌を歌うアーティストが曲紹介をしていた。

「あなたが私の『それ』を知る必要はないわ」

ぼんやりとしたような、彼女の声。紫煙の所為で、表情はよく見えない。

「私の世界は、生まれたときからこうだった。だからもういいの」

「あなたこそ、いつ死んでもいいと思っけていませんか」

隣から聞こえていた金切り声の歌が終わった。一瞬の静寂。それをすぐに破ったのは、彼女の声だった。

「そうね、私は。いつ死んでもいいと思ってる。だけど」

隣から次の曲のイントロが流れ出す。それに乗せるように、彼女は言いきる。

「死のうとは、思っけてないの」

死にたいも、死ななきゃも、死んでもいいも、死のうも、どれも似ているようで意味が違っう。

それは、俺自身よく知っけていた。

俺が彼女にできることはなんだろうか。図々しいだろうけど、そんなことを考えていた。

彼女はレモンティーを再び手にすると、一口すすった。どうやら冷めたらしい。ほうっと一息ついてから、何かの台本でも読むかのように呟いた。

「孤独しか知らないのならその方が、幸せなの。もっとはかの……愛とか、友情とか、そういうのを知っけてしまった後の方が、孤独になるのはきつと辛いわ。初めから孤独なら、もう何も感じないもの」
「……確かにその通りかもしれませんが。けどあなたは、きつと違っう」
「私はいつも一人で、それが普通だった。あなたとは違っうわ」

「そんなことない。あなただつて、さみしいとか、悲しいとか、そういう感情を持つてゐるはずだ。感じてゐるはずだ。だから、」
隣からキヤーキヤー流れる歓声を聴きながら、はつきりと言う。

「だから、ここに来るんでしょ」

彼女の方が言ったんだ。『一人じゃない感じがするから』って。

ちょっと外の空気を吸ってくると言って、私は部屋を出た。少し不安そうな、腫れぼったい眼をしている彼を残して。

店の外に出て物陰に移動すると、私は携帯を取り出した。この携帯に、登録しているアドレスはない。私は自分が知っている唯一の電話番号を親指で押して、携帯を耳にあてた。プルルル、と特徴のない呼び出し音が、しばらく続く。

「……どうした」

ふいに呼び出し音が途切れ、変声器でも使っているかのような低い男の音が頭の中に響いた。

「今度のターゲットのことを確認しておきたいんだけど」

「ちょっと待て」

受話器の向こうから、紙がこすれるような音が聞こえてくる。資料を探しているらしい。店の外にいても聞こえる、女性の金切り声を聞きながら私は待った。

しばらくしてから、何の感情もない無機質な声が資料を読み上げた。

「名前、三宅優。年齢は21。カラオケ店で働いているフリーターだな」

私は目を閉じて、ため息をついた。その音が聞こえたのか、受話器の向こうの男は、嘲笑するように言った。

「ターゲットにはもう接触したのか？」

「ええ」

「なんでわざわざ、そういうことをするのか。お前の能力なら、ターゲットと親密になる必要はないだろう。頭に触れるだけでいいのだから」

「それは、今は関係ないでしょう？」

不機嫌な声で答えると、忍び笑うような声が聞こえてきた。

「……で、要件はそれだけか」

「彼を始末しなければならぬ理由を教えてください」

「……………」

「彼は普通の男の子だわ。何の変哲もない。殺す理由が分からない」

「珍しいな、おまえがそんなことで電話してくるとは。情でも移ったか？」

何かを刺すような、低い男の声。私はわざと、抑揚のない口調で言う。

「別に。気になっただけよ」

「……………ふん」

男は気に食わないような声を出すと、資料の続きを読み始めた。

「父親からの依頼だ。確かに珍しいケースではある。この息子には特に目立った問題行動はないし、実の父親が「削除依頼」をしてくるなんてな。ただこの依頼者は、『息子は妻を殺した。だからあいつも同じように苦悩し、そして死ねばいい』と言ったそうさ。……俺も、詳しいことは知らないが」

「……………」

彼の話を、彼の涙を思い出す。

例えば私が手を下さなくても、彼はそうやって死んでいくだろう。

「どうした？」

「なんでもない。もう切るわ」

「……やるべきことは、分かってるな？」

ゆっくりとした確認。私はここではないどこかに目をそらしながら、言った。

「三宅優、の、……処分」

私がそう言ったのを確認し、一方的に電話が切られる。

通話終了を告げる電子音を聞きながら、私はしばらくその場に立ち尽くしていた。

彼女の『それ』を、全て埋めることは俺にはできない。それでも、少しくらいは塞いであげられないだろうか。

彼女が俺の『それ』に、ハンカチを差し伸べてくれたように。

10分もしないうちに、彼女は部屋へと帰ってきた。そのまま席には座らず、自分のたばことライターを手に取る。

「……まあ、あなたとこうやって話ができ、良かったとは思ってるわ」

そう言われて、自分の腕時計で時刻を確認した。いつの間にか、朝の8時半を過ぎている。9時にはここを出なくてはならない。

「ありがとね」

その声を聞いて、俺は腕時計から顔をあげた。彼女は笑っているのに、さみしそうな顔に見える。

俺は考えた。考えたと言っても一瞬で、それはほとんど勢いだっ
た。

「1日、俺にください」

「え？」

「あなたの今日を、俺に下さい。俺と付き合ってください。……今日だけ」

彼女は訝しげな顔で、俺の方を見た。けれど、あくまでも俺は真剣だった。

教えたかった。彼女が俺に教えてくれたみたいに。あなたも孤独

じゃないんだってことを。感情があるんだってことを。

人間だっことを、伝えたかった。

「正気なの？ 私は人殺しなのよ？」

「俺だっ人殺しです」

「それとこれとはわけが違っでしょう。それに、あなたのは人殺し
っ言わないわ」

「どうだっいいです」

彼女は呆れた顔で俺を見た。それから、ふっ笑った。

「とりあえず出ましよう。店長さんに怪しまれるわ。お会計は私が
持っから」

いや俺が、と言っ前に、彼女はさっさと部屋のドアに手をかけて、
笑った。

「次はあなたが御馳走してね」

こうして俺と彼女は、1日だけ付き合っことになった。

会計を済ませた後、店長に今日はバイトを休みたいと伝えた。もちろん渋られたが、実家の父親が危篤なのだと説明したら、すんなりと承諾してくれた。さっきの俺の泣き顔の意味が、店長の中では別の意味に変化したらしい。「1日と言わずにもっと休んでいい」と言われたが、それはさすがに断った。俺は、ずる休みがあまり好きではなかつた。

店を出ると、朝の澄んだ、けれども生ぬるい空気が体中に当たった。目覚まし時計の代わりになりそうな、蝉の大合唱。一瞬だけ意

識がはつきりしたような気がしたが、すぐに眠気が襲ってくる。そういえば、世間が活動している時間帯は、俺にとっては眠るための時間だった。

しかし、時間がない。なにせ1日限定のデートなのだ。今から早速どこかに行こう、と彼女に声をかけた。

「どこに？」

と訊かれてたちまち困る。全くのノープランだった。デートすることだって、ついさっき決まったところなんだから。

「野良さんは、」

と言いかけて、逡巡する。彼女のことを野良さんと呼ぶのは、なんとなく気が引けた。しかし、猫さんと呼ぶのもおかしい。

「野良でいいわよ」

察したのか、彼女は苦笑いした。

「野良さんは、どこか行きたいところとありますか」

「水族館」

即答。デートとしてはベタなところを選択されて、俺は笑った。

「魚が好きなんですか？」

「ううん、涼しい所がいいなと思っただけ。ただでさえ暑いのに、外は嫌」

なるほど。俺は彼女の考え方に少しだけ笑いながら、「ここから一番近い水族館を提案した。」

「じゃ、そこで」

彼女は迷うことなくさつさと、駅に向かって歩きだす。俺は慌てて、その後ろを歩き始めた。

盆休み明けの平日。そんな今日は、水族館も空いていた。小さな子どもを連れだした女の人や、大学生らしきカップルがちらほらいるくらいだ。まあ俺たちも、はたから見れば『大学生くらいのカップル』だろう。

彼女は、快適な室温の水族館に足を踏み入れ

「涼しい」

綺麗な顔でほほ笑んだ。どれだけ暑いのが嫌いなんだ、と内心で苦笑する。暑いのが苦手な割に、長袖のカーディガンを着ているのが少し不思議だった。

とりあえず道なりに、水族館の中を進んだ。トンネルのような作りになっている水槽の中を、ポーっとしながら通り抜ける。色とりどりの熱帯魚が、ゆったりと泳いでいた。水族館に来るのは久しぶりだったせいか、俺はいつの間にか、魚を見るのに夢中になっていた。

「ちょっと。デートだったんじゃないの？　なんで私たち、黙ってるの」

彼女にそう突っ込まれて、俺は慌てた。そうだった。デートだった。俺は話題を振ろうとして、そして、

「……………」

見事に沈黙した。

「……………なにか話す話題、ないの」

呆れたように彼女に言われるが、これといって思いつかない。

「野良さん、なにか話したいことはありませんか。俺、聞き役の方が得意なんですよ」

我ながら受動的な奴だなあと思う。へらへらと笑う俺の顔を見て、彼女は苦笑した。それから上を見上げて何か考えた後、

「もしもあなたの目の前に電気椅子があるとして、いきなりこう切り出した。」

「電気椅子？」

「死刑に使う道具」

「ああ、あれですか」

と言ったものの、実物は見たことないので想像するだけなんだが。「それがあなたの目の前にあるとして、『電気は通ってませんから、安心して座ってください！』って言われたら、座れる？」

座れる？ と言いながらこちらを見た彼女の眼は真剣だった。青い水槽の光を反射して、彼女の顔が青白く見える。俺は、できる限り真剣に考えて、答えた。

「ちょっと怖いですね。もしかしたら電気が流れるかもしれないですし、その椅子の上で何人も死んでるんだって考えたら……」

俺の答えを聞いて、彼女は笑った。

「そうね。……じゃ、もう一つ」

彼女は、今度はまっすぐ前を向いたまま、言った。

「クローン人間って、人間だと思う？」

「人間でしょ」

この質問には即答した。彼女は不思議そうな顔で、俺の目を覗く。「なんで？」

「なんでって、クローンだとしてもあなたは人間じゃないですか」
我ながら論理的でもなんでもない答えだが、そう思ってるんだからそう答えるしかない。目の前にいる彼女は、確かに人間なのだ。こうして話して、笑って。

「……ふーん」

腑に落ちないような、彼女の反応。その様子を見た俺は頭をひね
っってもう一度考え直して、

「あなたは人間ですよ」

やっぱり、そう答えた。

「人工的に作られた、しかも人を殺す能力を持った生物でも？」

「それでも」

「……そう」

小さな声で返事をして、彼女は眼を伏せた。

16 君の手を

ワニの水槽、イルカの水槽、クラゲの水槽。その横を、俺たちは無言で歩き続けた。

クローン人間も、人間だ。

俺がそう言ったあと、彼女がずっと黙っていたからだ。

だけど、ペンギンの水槽の前で、彼女はふいに口を開いた。

「私は、墮胎された胎児の遺伝子から作られた。難しいことは分からない。ただ……私は本当は、この世には生まれてなかった。……望まれて、いなかった」

凍ったように動かないペンギンの群れを見ながら、彼女が話す。

「気づけば、生ぬるい溶液に満たされた試験管の中だった。そこで私は、すさまじい速度で成長したの。……試験管の中で、1年で、20歳になった」

俺がよっぱどおかしな顔をしていたのだろう。彼女は俺の顔を確か認してから

「聞き流してくれていいわ」

諦めたようにそう言って、ペンギンへと視線を戻した。

「死んだはずの人間なのに試験管の中で生まれて、すさまじい速さで成長して、おまけに人を殺す能力まで持っていて。……私のこと、気持ち悪いとか怖いとか思わないの？」

「なんでそんなこと言ってますか」

俺は彼女の手に触れようとした。それを悟った彼女が、俺の手を払いのける。

「あなた馬鹿なの？ ……この手で何人殺したと思ってる？」

驚愕。恐怖。それとも、不安？ 彼女の声が若干震えているのは、なぜだろう。俺は彼女の手を見ながら、静かに尋ねる。

「その手で頭に触れられた人間は死ぬ、と言つてましたね。……それじゃ、あなたの手を握つても死ぬんですか？」

俺はなるべく小さな声で尋ねた。周りに人は少なかつたものの、あまり聞かれたくない内容ではある。彼女は自分の右手を自分の左手で握つてから、ゆっくりと目を閉じた。

「……死なないわ。あくまで死ぬのは、頭に触れたときだけ。それ以外の場所なら、大丈夫」

「だったら」

俺は自分の手を差し出した。

「手、繋いでもいいですか？」

彼女は俺の手を一瞥して、それから自分の手を見た。その様子を見ながら、俺はふと思ひ出した。

「電流が走つてない、電気椅子」

その単語を聞いた彼女が、俺の顔を見る。

「確かに、座るのは怖いです。けど、あなたに触れるのは怖くない。それは俺が自殺志願者だからとか、そんな理由じゃなくて」

彼女の眼を見ながら、言った。

「あなたが電気椅子じゃなくて、人間だから。処刑道具じゃ、ないから」

それを聞いた彼女が、また眼を伏せた。時間がゆっくり進んでいくような水槽のなかを、大きな魚が泳いでいるのが見える。

「……………」

彼女はこちらを見ずに、なにも言わずに、恐々こわこわと右手を差し出し

てきた。指先が、震えている。俺は無言で、彼女の右手を握った。
できる限り、そっと。

「……あつい」

下を向きながら、彼女が震える声で、言った。

17 手の温かさ

彼は馬鹿なんだ、と思う。完全に私に気を許している。私が、殺人鬼だと知っているのに。

あとは彼の隙をついて、頭に触れるだけでいい。ただそれだけでいい。きっと彼は、死んだ母親のことを想いながら、死んでいくだろう。

右手が、温かい。

私がクローンだと、そして人間兵器だと知っている組織の人間は誰ひとり、私には近づかなかった。私を作った、あの科学者ですら。

「近づくな。気味が悪い」

それが普通だと思ってた。それが当たり前だと、思ってた。

けれど彼は違った。彼は私の話を聞いても、怯えてなんかなかつた。手を、握ってくれた。

今まで何人もの人間を殺した、この手を。

右手が温かい。

だけど、もうすぐ彼の^こ手も冷たくなるだろう。

私が、彼を殺すから。

それが、私の仕事だから。

ナポレオンフィッシュという魚がいる。一言で言うなら、ものすごくブサイクな、でかい深海魚だ。

への字に曲がったたらこ唇と、突出したおでこ。なんていうか、ものすごく独特な顔つきの魚である。

そのブサイクな魚を、美人な彼女が真剣な顔で見ている。というか、見つめあっている。ナポレオンフィッシュがこちらを向いているので、どうしても見つめあっているように見えてしまう。

そのシュールな光景に、俺は思わず腹を抱えて笑った。

「なによ」

「だ、だって……」

そう言ってる間も、ナポレオンフィッシュは彼女のことをじっと見ている。

ペンギン。アシカ。イルカ。ラッコ。水族館の中にいるかわいい生き物たちの中で、彼女が最も気に入ったのは……エイだった。

彼女は人気のある可愛い生き物たちをスルーし、エイばかり見ている。いやまあ、エイもかわいいと言えはかわいいんだけど、

「なんか、UFOみたいじゃないですか？」

ふわふわ……いや、ひらひら？ 泳ぐエイを見ながら、俺は苦笑した。

「でも」

彼女はお腹を見せながら泳いでいくエイを見つめて、言う。

「笑ってるように見えるわ」

「ママー、エイさん笑ってるねー」

隣にいた小さな子供が、まったく同じタイミングで同じ感想を言

った。俺と彼女は顔を見合わせて、それから笑った。

「あらー本当ねー」

小さな子どものお母さんは、子供の頭を撫でながら「ほら、またエイさん来たよ」と笑っている。それを見た彼女が、ふいっと顔をそむけた。

俺は繋いでいた手を、少し強く握る。彼女は、握り返してこない。

「……自分の意志では、止められないのよ」

囁くような、誰にも聞こえないような、彼女の言葉。

「手のひらの微弱電流は、自分の意志では止められない。きっと……」

…私が死ぬまで、永遠に止まることはないわ」

頭を撫でている母親と、嬉しそうに甘える子供。

彼女が目をそむけた、その光景は、

彼女には、一生できないかもしれないこと。

通路の途中で、水槽に向かって座れるベンチのある休憩所を発見した。周りには誰もいない、穴場スポット。俺たちは横に並んで、ベンチに腰掛けた。

「……手、いつまで繋いでるの？」

彼女が繋いでる手を見ながら、苦笑いで言う。

「嫌ですか？」

「……………」

嫌だとは言われなかったけど、俺はそつと手を離した。そして空いた手で、彼女の頭を撫でた。なんとなく、撫でたいと思ったから触れた瞬間びくつとしたものの、彼女は目を伏せたまま何も言わない。「やめろ」とも言われなかったので、俺は彼女の頭をしばらく撫でた。はたから見たら、ただのいちやつくカップルだろうけど、幸い近くに人はいなかった。

彼女が膝を抱える格好で座りなおし、膝に顔をうずめた。彼女の表情が、こちらからは見えなくなる。彼女はしばらく浅い息を繰り返してから、

「……まだ、死ぬ気はある？」

くぐもった声で、そう訊いてきた。

もう死のうなんて思いません！ というのは嘘だ。俺はまだ死ぬ気である。彼女や、俺のことを生かそうとしてくれた母には悪いが俺は、俺のことが嫌いだった。だからさっさと殺して、終わりにしたかった。

「本当のことを言っわ」

彼女が、顔を膝に埋めたまま続ける。表情は、やはり見えない。

「あなたには名前がある。親がいる。戸籍がある。そこまで深い仲

じゃなかったとしても友達がいる。学校へ行っていた思い出がある。笑った思い出がある。……未来の選択肢がある。あなたはぜいたくすぎる。だから死にたいのかもしれないけれど」

少しだけ、彼女の声が大きくなる。俺は頭を撫でるのをやめて、彼女の言葉に集中した。

「正直に言う。私はあなたがうらやましい。勝手なこと言うなって怒ってくれてもいいわ。でも続ける。私はあなたがうらやましい。私だって、私の『普通』が世間で言う『普通』とはかけ離れてることとは、知ってるの」

そこまで言って、彼女は言葉を切った。それから、自嘲気味に笑った。

「一瞬でも、生まれた瞬間でも誰かに愛されて、大切にされて。幼稚園に行つて、小学校、中学校……。外でかけっこして、友達とおしゃべりして、学校で勉強して、ちよつと悪さもして。あなたには『今まで』がある。そして、『これから』も」

彼女の肩が、声が、わずかに震える。

「私には何も無い」

吐き捨てるように、彼女は言った。

「生まれたときから人間ではなかった。人間として扱われなかった。愛された覚えはない。もちろん学校なんて行ってない。人と触れるのは、殺すときだけ」

彼女の声の震えが大きくなる。肩の震えも。

「刃物で殺したことはない。銃で殺したこともない。身体を血で汚したことはない。けれど自分の身体に、血のにおいがこびりついている気がするの。それをごまかすように、煙草を吸う。何も考えないように、何も感じないように。これが普通、これが普通なんだっ

て」

俺は少しだけ、彼女に近づく。

「そこまでして……人殺しまでして、私は自分を生かそうとする。そこまでして、私を生かす理由なんて、私は持っていないのに」

俺は手を伸ばして、彼女を抱き寄せた。さらりとした彼女の髪の毛の感触と、細い肩。

彼女は若干バランスを崩して、俺の胸にもたれかかった。驚いたような顔で、俺を見る。怒られるかと思っただが、彼女は何も言わない。ふっと漏れる彼女の吐息。それと同時に零れおちる、綺麗なそれは。

「だけど俺は、あなたには生きていてほしい」

彼女の息が、若干荒くなる。

「私は死んだ方がいい。人殺しよ？」

「……それでも」

彼女の温かい吐息が、俺の胸にあたった。彼女は確かに生きている。感情を持っている。震えて、泣いている彼女は、

「道具なんかじゃない」

俺は、ずっと一人で生きていこうと思っていた。人と関わるのはやめようと思っていた。なのに俺は、自分を止められなかった。俺はやっぱり、

「あなたが好きです」

きつと、あなたの孤独をこの目で見た、その時から。

20 終わり

「お前が人を殺せなくなった時、その時がお前の『終わり』だ」

この言葉を、私は何度言われただろう。

人を殺せない私は、ただの化け物で、ゴミなんだ。

生まれた時からずっと、そう思ってた。

幸せなんて知らない。

普通なんて知らない。

知らない方が、いい。

だけど。知りたかった。幸せに、……普通になるのが無理ならせめて。

ターゲットと接触しては、話をした。

子供の頃の話、食べ物の話、初恋の話、ペットの話、仕事の話、恋愛の話……。

たわいもないような話をたくさん聞いて、その話と自分を重ねた。

自分がもしも普通の人として生まれてきていたら、どうなっていたのかって。

その作業がただ虚しさを広げるだけだということは、知ってた。

彼とも、たくさん話をした。

私は初めて、自分のことを話した。

私は初めて、自分の存在を認めてもらった。

嬉しかった。

だけど彼は、私のターゲットだった。

だから私は、彼を殺さなければならなかった。

だから。

私は、『終わり』を選ぶよ。

21 一めんね

俺の胸の中で震えていた彼女は、しばらく泣きやまなかった。俺は静かに、彼女の背中をさする。少しずつ小さくなる震えと、嗚咽。泣きやんだかと思えばまた泣き始める、を彼女は何度か繰り返した。俺はもう、何も言わなかった。言葉は邪魔だと、思ったから。

やがて彼女は、

「わ……………」

しゃくりをあげながらも、何か言おうとした。そんな彼女に、俺は囁くように言う。

「大丈夫。ゆっくりでいい」

「…………私の言うとおりに…………して、ほしい」
とぎれとぎれの、彼女の言葉。

「なんですか？」

彼女は俺の胸の中で大きいため息をつく、と、ゆっくりと俺から離れた。俺は彼女の顔を見る。赤く充血した目と、涙で濡れた睫毛。泣き顔ですら、彼女は綺麗だった。

彼女は鼻をすすると、下を向いたまま話はじめた。

「今日、家に帰ったら急いで荷物をまとめて。それで、この町から出てほしい。もう2度と、今住んでる家には戻らないで。…………使ってる携帯は壊して。ホテルに泊まるときは、偽名を使って」
いっぺんに色んなことを言われて、俺は首をかしげる。

「どういうことですか」

「……………」

彼女は黙ったままだ。透明な雫が彼女の目からこぼれおちて、ジーンズにシミを作った。俺は右手をのばして、彼女の頬に流れている涙をぬぐう。

「お願い、だから」

彼女はそう言うと、ぼろぼろと涙をこぼした。それを見て、俺はやっと気づく。

彼女が頻繁に俺のバイト先に来ていた理由を。俺に近づいた、その理由を。

「……………あなたはとうするんですか」

俺の声も、かすかに震えた。彼女の気持ちに気付いてやれなかった自分に対する怒りと、彼女を失うかもしれない恐怖で。

「組織に、戻るわ」

「そしたら、あなただってとうなるか……………」

不安を隠しきれない俺の声を聞いた彼女が、わずかに上を向く。俺が気付いたことに、彼女も気付いた。

「私は大丈夫よ」

ほほ笑んだ彼女の目尻から、涙がこぼれおちる。俺はそれを見て、覚悟を決めた。

「あなたも一緒に逃げましょう」

「……………だめ」

「どうして」

「私は、」

そこまで言って、言うのをためらう。泣きやもうとしているのか、しばらく浅い呼吸を繰り返してから、彼女は笑った。

「私といたら、あなたがだめになるから」

「誰がそんなこと決めたんですか」

「……………」

彼女は口を閉じると、しばらく何かを考えていた。目の前の水槽を、小さなサメがゆっくりと横切っていく。

「あなたは、俺のこと嫌いですか」

「そんなこと、」

反論しかけて、また黙りこんだ。

「だったら一緒にいてください。一人で逃亡生活なんて、俺はいやですよ」

俺が笑うと、彼女もゆっくりほほ笑んだ。彼女の綺麗な笑顔が、滲んで見えた。

小さな声で話をしながら、水族館を出る。それから無言で、駅へと向かった。

同じ水族館から出てきた人は、みんな笑顔だ。あの魚が可愛かったとか、カワウソのショーが良かったとか。……とても楽しそうに見える。

俺たちは、どうだろう。無言で、無表情で、けれど手を繋いで。世界の終わりみたいな顔をしているかもしれない。けど、終わりじゃなくて始まるんだ。俺は彼女の手を、きつく握った。彼女は無言で、無表情で、それでも握り返してきた。それだけで、よかった。

「俺はとりあえず家に帰って、荷物をまとめてきます。 2時間後に、ここでもた」

俺が笑うと、彼女は頷いた。繋いでいた手を、ゆっくりと離す。それと同時に彼女が俯くのを見て、

「絶対に、ここにいてくださいよ」

俺はくぎを刺した。そう言っておかないと、彼女はどこかに行ってしまうような気がした。彼女はしばらく黙っていたが、やがて顔をあげた。泣き腫らした眼だった。

「優」

彼女の唇が、俺の名前を紡ぐ。そういえば、名前を呼ばれるのは久しぶりだ。

「ん？」

「あ……」

少しの沈黙。蝉の鳴き声と、周囲から聞こえる楽しげな笑い声。彼女は自分の口を両手で覆った。それから目をつぶり、振り絞るような小さな声で

「好き。……ごめんね」

「ごめんね、はいらない」

俺は笑って彼女の頭を撫でて、手を振った。

きつと、どうにかなると思う。二人一緒なら、きつと。

俺は自分の部屋で荷物をまとめながら、あれこれ考えていた。彼女のことだったり、これからのことだったり。そう言えばバイト先の店長に、辞めると電話していない。……それどころでもないか。レモンティーが熱すぎたようですよ、くらいは伝えておけばよかったかな。なんて、どうでもいことを考えながら必要最低限の荷物をまとめていく。

衣類を適当に詰め込んでから、預金通帳を開いた。

葬儀代にしようと思っただけ貯めてたこの金が、逃亡資金になるなんて思ってもみなかったな。

一人で苦笑して、通帳をかばんに突っ込んだ。その時だった。

ピンポーン

安っぽく、古臭いインターホンの音が部屋に響いた。腕時計で時刻を確認する。18時25分。普段なら眠っている時間だ。そしてこの時間に、誰かが訪ねて来たことはほとんどなかった。誰だろう。大家さんか？

俺は首をかしげながら、ドアへと向かった。このボロアパートには覗き穴がついていない。何の確認もせずに、ドアを開けた。

「……あ」

ドアの前に立っていたのは、彼女だった。

「あれ？ 駅で待ち合わせって言ったのに」

俺は笑ってから、ふと気付く。

先ほど別れた時と、彼女の服装が違うことに。

今日、彼女はタンクトップにカーディガンを羽織ってたはずだ。けれど目の前の彼女は、半袖のＴシャツ姿だった。

「……野良、さん？」

彼女は無言のまま、口だけが笑っていた。俺の中の違和感が、警戒心へと変わっていく。

けれど、遅かった。

彼女は頬笑んだままゆっくりと、

ゆっくりと、俺の頭に右手を置いた。

「……！」

振り払おうとしたが、間に合わなかった。急激に歪む視界と、吐き気がするほどの激しい耳鳴り。俺はバランスを崩し、頭を抱えた格好でその場に倒れこんだ。

訳が分からなくなるほどの罪悪感。罪業感。喪失感。希死念慮。幻聴。幻覚。

その中でかろうじて聞こえた、彼女の言葉。

「さよなら、三宅優」

そこで、俺の意識は途切れた。

23 処分

「ノラネコ」

名前を呼ばれて、私は振り返った。向こうから歩いてきていたのは

「……………あなたは何番？」

私と同じ顔をした、人間^{クローン}だった。黄色のワンピースを着た彼女はくつくつと笑いながら、私の目の前までやってきた。周囲には、他に誰もいない。

「23番だよ。ノラネコ、あんたは分かりやすいよね。自分で自分の名前を考えたクローンなんて、あんたくらいだよ。年中長袖着てるやつも、あんた1人だけだし」

そう言われて、私は反射的に右手で左手首を掴んだ。それを見ていた23番が、笑う。

「知ってるよ。手首切ったんでしょ？ ていうか、なんでそんなこととしたの。死にたかったわけ？」

「違うわ」

私は、自分の手を見ながら呟く。

「……………こんな手、いらなと思ったから」

ヒトを殺すことしかできない手なんて、いらなと思ったから。

けれど彼ならきつと、私のこの傷を見ても許してくれるだろう。そしてきつと、手を繋いでくれる。

彼なら、きつと。

「……………ふーん」

興味のなさそうな、23番の返事。それから

「ターゲットは始末した？」

私の瞳の中を覗き込んでいるかのように、彼女は私から目を離さない。

「……まだよ」

「手こずってんの？」

「まあ、そんなところ」

「へえ……」

彼女は私から目をそらすと、ちよつど駅にやってきた電車の方を見た。それから、冷たい声で言った。

「なんか手こずってるみたいだからさ。8番が、代わりに始末しに行つたよ？」

「……！」

表情を変えた私を見て、23番は愉快そうに笑った。それから、私の左腕をつかむ。

「離して！」

「ノラネコ。私たちはさ、ヒトが殺せなくなつたらおしまいなんだよ？」

そう言つと彼女はポシエツトから素早くハンカチを取り出して、私の口にあてがった。

「やつ……！」

「あんたは、人目に付かないとこで処分しろって言われたんだよ。もうあんたはゴミなの。分かるよね？……あーあ。クローンを殺すのに、微弱電流くわいじゆうが使えないってのは面倒くさいねホント」

嘲笑するような笑い声が、私の頭の中に響く。

ゆっくりと遠のいていく意識の中で、私は彼の名前を、呼んだ。

エピローグ 何度でも

「死んだ人ってさ、生まれ変わったりすると思う？」

1歩先を歩く彼に向って、私は小さな声で言った。散々泣いた後だったので、腫れた眼を見られないように俯いたまま。

横にある水槽の中を、大きなウミガメがゆったりと泳いでいた。

「うーん。死んでみないと分からないですね」

彼は笑いながら、ウミガメの方を見た。

「……もしも生まれ変わるなら、今度は普通の人間として生まれ
てくれるかしら」

私の言葉で、彼がこちらを振り返る。私は彼の眼を見ようとして、
けれど見れないまま、呟くように言った。

「もしも普通の人間に生まれ変わったら、もう一度あなたの側に来
てもいい？」

それを聞いて、彼が微笑む。そして、はっきりと言った。

「普通じゃなくても人じゃなくても、俺のところに来てください。
俺も生まれ変わったら、あなたのところに行きますから」

そしてまたこうやって、手を繋ごう。何度でも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8385u/>

人を殺すために生まれたノラネコ

2011年8月5日15時56分発行